中エジプト語強調構文の統語構造
——日本語構文との比較対照の観点から——

On the Syntactic Structure of
the Middle Egyptian Emphatic Construction:
A Comparative Analysis with Japanese Constructions

小山 彰^{*}
KOYAMA Akira

ABSTRACT In Middle Egyptian grammar, the construction known as the emphatic construction is a construction with a focalized adverbial adjunct. Two models have been proposed for the syntactic structure of this construction: the adverbial-sentence model (ASM) of H. J. Polotsky and the nominal-sentence model (NSM) of J. P. Allen.

Ex. *šḳdd t' hft wḏ=k* (Peas. B1 298-299)

It is according to your command (*hft wḏ=k*) that the land sails (*šḳdd t'*).

ASM: S $\Rightarrow$ [*šḳdd t'*]_{NP} [*hft wḏ=k*]_{AdvP}

NSM: S $\Rightarrow$ [*šḳdd t' hft wḏ=k*]_{NP}

(AdvP=adverbial phrase; NP=noun phrase)

Although ASM has a very great influence on current research, the question of the relative merits of the two remains controversial. This paper treats this problem through a new approach. It compares these two models and two focus constructions in Japanese: (a) the “*wa*” cleft sentence corresponding to ASM and (b) the “*no da*” in-situ focus construction corresponding to NSM. The above sentence can be translated into Japanese in the following ways:

ASM: *kokudo-ga koukou suru no-wa, anata-no meirei ni shitagatte da.*

land-NOM sailing do NOMP-TOP you-GEN command to according COP

NSM: *kokudo-wa, anata-no meirei ni shitagatte koukou suru no da.*

land-TOP you-GEN command to according sailing do NOMP COP

(COP=copula; GEN=genitive; NOM=nominative; NOMP=nominalizing particle; TOP=topic)

* 本学会会員

Member of the Society for Near Eastern Studies in Japan

The cases of the following focalized elements are examined:

- (1) an adverbial phrase which exists in a doubly embedded clause (ex. Urk. IV 80, 17),
- (2) a dative *n* + suffix pronoun followed by a nominal subject (ex. CT IV 134c),
- (3) an interrogative adverb followed by a direct object (ex. CT III 51f).

It is concluded that NSM is more valid than ASM.

はじめに

中エジプト語の強調構文は、⁽¹⁾ポロツキー H. J. Polotsky によりはじめて、コプト語の第2時制の祖形式として認知された (Polotsky 1944, 69-96)。本稿で議論するこの構文の統語構造については、これまでにポロツキー自身による副詞文モデルとアレン J. P. Allen による名詞文モデルの2つが提案されているが、⁽²⁾現状、(問題点の指摘も含めた) 議論の対象となるのは前者のみであり、後者が取り上げられることはない。しかしこの副詞文モデルの優位性は、十分な検証を受けた結果として名詞文モデルが淘汰されたためによるものではない。つまり、この2つの統語モデルのうちのいったいどちらが、この構文全体を理解するうえで有利であるのかという命題は、実際には未解決のまま残されており、この構文に関する議論がこれまで棚上げにしてきた問題であるといえる。

そこで本稿では、この名詞文モデルを再度議論の俎上にのせ、日本語構文との比較対照という観点から当該モデルを副詞文モデルと対比することにより、両者の妥当性についての検証を行うとともに上記の問題に対する見解を提示したい。

I. 問題の在処

1. 強調構文の基本特性

強調構文は、例文1が示すように、⁽³⁾定動詞形 (*sḳdd t/*) と副詞類 (*hft wd=k*) の2つの成員を必須構成要素として構成される。⁽⁴⁾

【例文1】Peas. B1 298-299

sḳdd t/ hft wd=k

“It is by your command that the land sails”⁽⁵⁾

“C’est selon ton commandement que le pays navigue”

したがって、副詞類をともなう接尾活用の動詞形と強調構文のあいだに構成上の違いはない。しかし、前者とは異なる固有の地位を後者に与えているのが、この構文を構成する定動詞形が示す形態・統語上の特性と、副詞類が示す情報伝達上の特性である。

i) 形態・統語上の特性

強調構文には複数の種類の定動詞形を利用することができるが、このうちの未完結 $mrr=f$ では、特定の動詞クラスに属する動詞において特徴的な形態を示す。たとえば例文 1 で弱動詞 $skdi$ 「航行する」の第 3 子音が畳音して $skdd$ に変化しているように、弱動詞および畳音動詞では畳音化の現象が認められる。また変則動詞 rdi 「与える、～させる」および ii/iw 「来る」は、それぞれ dd と $iw(w)$ の形で現れる。⁽⁷⁾

このような特徴的な形態を示す未完結 $mrr=f$ には、強調構文以外の用法として、①名詞文の構成要素、②動詞の主部／目的語、あるいは③前置詞の目的語としての用法等があり、それらの用法ではいずれも名詞節として利用されている。⁽⁸⁾ このことから類推して、強調構文に出現する定動詞形も、名詞的動詞形として機能しているものと判断される。

ii) 情報伝達上の特性

話し手／書き手から聞き手／読み手への情報伝達の視点からみた場合、強調構文に固有の特性は、この構文において聞き手／読み手にとって最も重要な情報を担う役割、すなわち文の焦点が副詞類に割り当てられていることである (Loprieno 1995, 192)。⁽⁹⁾ したがって強調構文は、文内部に存在する（一部あるいはすべての）副詞類を焦点化する特性を有する構文であるといえることができる。

上述の特性を例文 1 に適用するならば、前置詞句 $hft\ wd=k$ が文の焦点であり、結果として定動詞形 $skdd\ t$ の意味する事態（「国土が航行する」）の成立が、前置詞句の意味内容（「あなたの命令に従って」）によって条件づけられる解釈が導かれることとなる。⁽¹⁰⁾

2. 統語構造に関する従来の分析

前節で述べた特性を有する強調構文の統語構造については、冒頭でも触れたようにこの構文の発見者であるポロツキー自身による副詞文モデルと、アレン

による名詞文モデルの2つがこれまで提案されている。本節では各々のモデルの内容を概観する。

i) 副詞文モデル⁽¹¹⁾

ポロツキーはコプト語の第2時制を含む文を、アラビア語との比較対照の観点から、例文2に示されたように、主部である名詞句(NP)としての第2時制と述部である副詞類(ここでは副詞句(AdvP))から構成される文(S)、すなわち副詞文であると分析した(Polotsky 1944, 66-68)。

【例文2】コリント人への第2の手紙4, 3⁽¹²⁾

εϣ20BC NNεTNA TAKO

“It is veiled only to those who are perishing”

S ⇒ [εϣ-20BC]_{NP} [N-N-εT⁰-NA-TAKO]_{AdvP}

ポロツキーはさらに、この分析を中エジプト語に対しても類推的に適用することにより、強調構文を、主部である名詞的動詞形と述部である副詞類から構成される、副詞文であるとみなした。⁽¹³⁾

このモデルを適用すれば、例文1は以下のように統語分析される。

S ⇒ [skdd t']_{NP} [hft wd=k]_{AdvP}

したがって前節で述べた特性をふまえるならば、このモデルでは、定動詞形が主部として機能するために名詞化され、述部の役割が副詞句に与えられることによって、それが文の焦点として機能するようになると理解される。

ii) 名詞文モデル

ポロツキーは1976年に、副詞文モデルを起点として構築された、中エジプト語における動詞の転換(*transposition*)の体系を提示した(Polotsky 1976)。しかし、その後しばらくしてアレンは、『『強調』文は副詞述部構文か?』と題する論文を発表することにより、副詞文モデルに対して異議を唱えた(Allen 1979)。

彼がその手掛かりとしたのは、a) 初頭小辞への後接、b) 文否定、c) 名詞節化、d) 副詞節化、およびe) 関係節化の5つのケースにおける、強調構文、副詞文、および名詞文それぞれの統語的なふるまいである。すなわち、これらのケースにおけるそれぞれの文のふるまいを比較し、強調構文は副詞文よりも、むしろ名詞文の統語規則に従うという事実を示したのであった(Allen 1979, 7-10)。そしてこのことからアレンは、強調構文は名詞述部をとまなう文であり、

その本質は、表現された主部をとみなわない名詞述部として、定動詞形を名詞化することにあると結論づけた⁽¹⁴⁾ (Allen 1979, 10-11)。

このモデルを適用すれば、例文 1 は以下のように統語分析される。

$S \Rightarrow [skdd\ t\ hft\ wd=k]_{NP}$

この分析から導かれる強調構文の解釈について、アレンは、例文 1 のケースであれば “it is (a fact) that the land sails by your command” となるような、表現されていない主部を名詞述部に対して補った「2 重叙述 (*double predication*)」であるとしている (Allen 1979, 11)。

他方、この構文の副詞類が焦点としての役割を担う特性に関しては、副詞類が論理的述部 (本稿における焦点) であることは、文法構造に一致するとは限らず、強調構文の環境によってその文に対して課せられるものであるとしている (Allen 1979, 13)。

3. 検討課題

前節で紹介した 2 つの統語構造のモデルは、どちらも定動詞形の名詞化を前提としたうえで、それぞれ独自の根拠のもとに設定されたものである。したがって両者は仮説として対等な地位に位置づけられなければならないが、副詞文モデルと名詞文モデルを対比して検討するという基本的な作業はいまだなされて⁽¹⁵⁾いない。

したがって本稿の目的は、具体的な用例分析を通じて、上記の 2 つのモデルを突き合わせることににより、どちらが強調構文の統語構造として妥当性が高いのかについて検証を行うことにある。

II. 課題解決のための方法

1. 副詞文モデルと名詞文モデルの比較評価方法

前節で掲げた両モデルの突き合わせを実施する方策として、本稿では西欧主要語にはない日本語の利点、すなわち後者には両方のモデルに形式・機能の両面に対応する構文が存在するという点を活用し、それらの構文を媒介することにより両モデルを間接的に比較する方法を採用する。

具体的な比較作業としては、さまざまな強調構文の用例に対して、副詞文モデルと名詞文モデルの各々に対応する日本語構文の適用による翻訳を試み、統

語的な観点からの適合性の有無，ならびに意味内容の観点からの適確性の有無についての確認を行う。もしある用例において，一方のモデルに対応する構文が適合性，適確性の両方を有するのに対して，他方のモデルに対応する構文が適合性か適確性の少なくともいずれか一方を欠く結果が得られたならば，その用例は前者に対応する統語モデルを支持するものと理解される。さらに，そのような有意な用例を複数検討した場合に，それらの用例がいずれも同一のモデルを支持する結果が得られるならば，その支持を受けたモデルは，強調構文の統語モデルとしてより高い妥当性を有していると判断することが可能となる。

2. 日本語構文に求められる要件

前節では，2つの統語モデルを比較する媒体としての日本語構文について触れた。中エジプト語と日本語とでは基本語順からして異なるため，この2つの言語の構文が形式的に完全に一致することは，もちろんありえない。しかしそうであっても，両言語の対応する構文が基本的な要件を共有していれば，本稿で試みる比較の媒体としての役割を果たすことは可能である。そこで本節では，中エジプト語の2つの統語モデルが，それらに対応する日本語構文に求める要件について整理しておきたい。

まず2つのモデルに共通する基本要件として，前章1節で述べた強調構文の特性から，①「動詞形の名詞化」と②「副詞類の焦点化」の2点を挙げることができる。

反対に，これらの2つのモデルを区別する素性は，名詞化動詞形と焦点化副詞類の統語関係に存在し，それは例文1に対する両モデルの分析結果の対比から示される。

副詞文モデル： $S \Rightarrow [skdd\ t]_{NP} [hft\ w\dot{d}=k]_{AdvP}$

名詞文モデル： $S \Rightarrow [skdd\ t]_{hft\ w\dot{d}=k}]_{NP}$

比較によって明らかになるように両モデルにおける統語構造の違いは，動詞形の名詞化という操作にともなって，③「名詞化される範囲の外部に焦点化副詞類が位置している」のか（副詞文モデル），あるいは④「名詞化される範囲の内部に焦点化副詞類も含まれている」のか（名詞文モデル）という差異に置き換えることができる。

さらに副詞文モデルの場合には，⑤「構成要素が NP → AdvP の順序で配置

されている」ことが、形式的な対応のうえで考慮されなければならない。⁽¹⁶⁾

以上のことをまとめれば、副詞文モデルに対応する構文に対する要件は①②③および⑤であり、名詞文モデルに対応するものでは①②および④になる。

3. 日本語の焦点化構文

前節で抽出した要件をふまえて、本節では副詞文モデルおよび名詞文モデルに対応する日本語の焦点化構文を概観する。

i) ハ分裂文⁽¹⁷⁾

副詞文モデルに対応する日本語の構文は、ハ分裂文「～のは～だ」である。ハ分裂文では、先行する「～のは」の部分に述部を含んだ節が準体助詞「の」により名詞化されて入り、後続する「～だ」の部分に名詞化された節の意味内容を補う要素が文の焦点として入る。そして「～だ」の部分に入ることのできる要素には、従属節や格助詞をともなう名詞が含まれるため、強調構文のように副詞類を焦点にすることが可能である。

以上のことをふまえて、例文1をハ分裂文で邦語訳するとともに統語分析すれば以下のようになり、ハ分裂文と副詞文モデルとの対応を確認することができる。

S ⇒ [国土が航行するの]_{NP} は、[あなたの命令に従って]_{AdvP}⁽¹⁸⁾

ii) ノダ構文⁽¹⁹⁾

日本語のノダ構文は、ある文の述部に準体助詞「の」を付与して名詞化し、さらに「だ」を付与することにより、元の文を名詞文に準じる形に変える構文である。ノダ構文を構成する「のだ」は、「スコープの『の(だ)』」(野田 1997, 31-59)と「ムードの『のだ』」(野田 1997, 61-104)に区分されるが、このうち本稿での議論に関連するのは前者である。⁽²⁰⁾「スコープの『の(だ)』」をともなうノダ構文(以下、ノ(ダ)構文)の機能は、準体助詞「の」による述部の名詞化のスコープに入る要素、すなわち名詞化される範囲に含まれることのできる要素を、焦点化することにある。具体的には格成分、様態・頻度の副詞、制限的修飾成分、述部の一部などがそれに相当する要素であり、そのため副詞類を焦点にすることが可能である。⁽²¹⁾したがってノ(ダ)構文は、前節で検討した名詞文モデルに対応するための3つの要件、①②および④を満たしていることになる。

以上のことをふまえて、例文 1 をノ(ダ)構文で邦語訳するとともに統語分析すれば以下のようになり、ノ(ダ)構文と名詞文モデルの対応を確認することができる。

S ⇒ 国土は、[あなたの命令に従って航行するの]⁽²²⁾_{NP}だ

4. 用例分析における比較のねらい

前節で議論した 2 つの統語構造モデルに対応する例文 1 の邦語訳を、以下に再掲して比較してみよう。

【例文 1'】Peas. B1 298-299

⁽²³⁾
skdd tʃ *hft wɔ* = *k*

ハ分裂文：「国土が航行するのは、あなたの命令に従ってだ」

ノ(ダ)構文：「国土は、あなたの命令に従って航行するのだ」

ここで提示された 2 つの邦語訳は、意味内容において等価であり、統語分析上も欠点は認められない。したがってこの用例からは、ハ分裂文が対応する副詞文モデルとノ(ダ)構文が対応する名詞文モデルのどちらが、統語構造としてより妥当であるかの判断を下すことはできない。

強調構文の大部分の用例は、このように両方のモデルに対して「中立的」な事例であるが、一部の用例では両者の統語的妥当性、あるいは解釈の内容に差の現れる場合がある。本稿が着目するのはこのような「非中立的」な事例であり、このわずかな「ほころび」を通じて両モデルの妥当性に対する評価を引き出すことが、次章で実施する用例分析の最終目標である。

III. 用 例 分 析

1. 中立的事例

本章では、議論の中核となる非中立的な事例の検討がむろん焦点となるが、その事前作業として、代表的な中立的事例を概観することにより、ハ分裂文およびノ(ダ)構文と強調構文の一般的な適合性をまず確認しておきたい。ここでは大きく肯定文と否定文に分けて検討する。

i) 肯定文

強調構文の典型的な用例として、焦点部分に疑問詞を含んだ副詞類を充てているものを挙げることができる。以下に示した 3 つの用例は、それぞれ疑問詞

を含んだ副詞、副詞句および副詞節を焦点化している。

【例文 3】 Semnah Desp. 2, 14

ii.n=tn tn

ハ分裂文：「あなたたちが来たのは、どこからか？」

ノ(ダ)構文：「あなたたちは、どこから来たのか？」

【例文 4】 CT III 50d B1C

ii.n=k ir(f) r wnm išst

ハ分裂文：「あなたが来たのは、いったい何を食べるためにか？」

ノ(ダ)構文：「あなたは、いったい何を食べるために来たのか？」

【例文 5】 CT V 122b-d A1C

mrr tw it=k ir=k n=f išst

ハ分裂文：「あなたの父があなたを愛するのは、あなたが彼に何をするときにか？」

ノ(ダ)構文：「あなたの父は、あなたが彼に何をときにあなたを愛するの
か？」

疑問詞を含む副詞類の種類に関らず、ハ分裂文およびノ(ダ)構文による邦語訳は、⁽²⁴⁾どちらも適格な文であるとともに、両者に解釈上の相違を見出すことはできない。

上記の用例では焦点化された副詞類の数は1つであったが、強調構文は複数の副詞類を焦点化することもできる。

【例文 6】 BD(Nu) Ch.125 109-111

dd=tw r pn w^b(w), twr(w), wnhw m hbsw, tbw m hdy, sdmw m msdmt, wrhw m ntyw, wdn.n=f k'w 'pdw sntr t hnt smw

ハ分裂文：「人がこの呪文を唱えるのは、清浄で、清潔にし、衣服を着、白いサンダルを履き、コールをつけ、ミルラを塗り、牛、鳥、香、パン、ビール、野菜を捧げたあとにだ」

ノ(ダ)構文：「人は、清浄で、清潔にし、衣服を着、白いサンダルを履き、コールをつけ、ミルラを塗り、牛、鳥、香、パン、ビール、野菜を捧げたあとにこの呪文を唱えるのだ」

死者の書の第125章の最後に朱書きで記されたこの用例では、6つの状態形と1つの *sdm.n=f* 形を含む合計7つの副詞類が、呪文を唱える際の規定とし

て焦点化されている。この用例を引用したポロツキーは、このように多数の焦点化副詞類をとまう文の場合、英・仏語の分裂文を用いて翻訳することが困難または不可能になるとしている（Polotsky 1965, 8）⁽²⁵⁾。しかし、日本語のハ分裂文の場合にはそのような不具合を免れることが可能であり、ノ（ダ）構文と同様に適確に邦語訳することができる。⁽²⁶⁾

ii) 否定文

強調構文を否定する形式には、否定動詞 *tm* を用いるものと、非連続の否定辞 *n ... is* を用いるものの2つが存在する（Allen 2000, 379-380）。

否定動詞 *tm* を用いた場合には、*tm* を本動詞とする定動詞形に、否定される動詞語彙を担う否定補語が後続することにより、強調構文に用いられる名詞的動詞形の否定形を形成する。そしてその邦語訳には、準体助詞「の」に前接する述部を否定したものが対応する。

【例文7】Westc. 6, 5

tm = t hn hr m

ハ分裂文：「あなたが漕がないのは、なぜか？」

ノ（ダ）構文：「あなたは、なぜ漕がないのか？」

他方、否定辞 *n ... is* は、2つの要素 *n* と *is* が名詞的動詞形を括るように現れ、焦点化副詞類の意味内容が、名詞的動詞形とその他の構成要素によって示される行為等の成立に関与することを否定する。そしてその邦語訳には、否定の「ない」が繫辞「だ」に後続したものが対応する。

【例文8】CT VI 401n

n ii.n = f is ds = f

ハ分裂文：「彼が来たのは、おのずからではない」

ノ（ダ）構文：「彼は、おのずから来たのではない」

以上本節では、一般的な統語環境下にある中エジプト語の強調構文に対しては、日本語のハ分裂文とノ（ダ）構文のどちらも広く適合可能であることを確認した。

2. 非中立的事例

前節で具体的に確認したように、強調構文の用例の大部分は、統語分析の妥当性を検証するうえで副詞文モデルあるいは名詞文モデルのどちらにも与しな

い。これに対して以下で検討する3つの事例では、用例が一方のモデルの妥当性を支持するふるまいを示すために、この中立性が崩れている。そして注目すべき点は、そのような非中立的な事例によって支持されるのが、いずれのケースにおいても名詞文モデルであるということである。

i) 使役文に含まれる副詞類の焦点化

中エジプト語では、他動詞 *rdi* 「与える」の動詞形とその目的語相当節として埋め込まれた接続法 (*subjunctive*) *sdm=f* の組み合わせにより、使役の意味を表現する文が形成される (Allen 2000, 254-255)。次の用例は、そのような使役文を強調構文にしたものである。

【例文9】Hegarakht II, 37

dd=k htp=f hr mrt=f

ハ分裂文：「あなたが、彼が満足するようにさせるのは、彼の望むことについてだ」

ノ(ダ)構文：「あなたは、彼が彼の望むことについて満足するようにさせるのだ」

詳細に見れば明らかなように、この用例に対するハ分裂文とノ(ダ)構文による邦語訳の意味内容は等価ではない。それは、焦点化された副詞類「彼の望むことについて」が直接結びつけられる動詞とその主部の対が、前者では「あなたが - させる」なのに対して後者では「彼が - 満足する」であり、双方で異なるためである。このように使役文の強調構文では、ハ分裂文とノ(ダ)構文の邦語訳に明らかに意味的な差異が存在している。しかしながら、両者の間に存在している意味内容の差異は、この文を解釈する上で重大な齟齬をきたすほどのものではない。したがってこのような事例から直接、2つの統語構造モデルのどちらが妥当であるかの判断を、根拠をもって下すことは困難である。

この問題を解決するための有効な指針を与えてくれるのが、使役文がさらに使役文に埋め込まれている以下の用例である。

【例文10】Urk. IV 80, 17

[先行文脈]

①表題：「王子・南の異国の長官トゥリ (*Twri*) への(トトメス1世の) 王令」

②トトメス1世の即位の通知

③新たに定められた5つの王名の通知

iḥ dd=k di.tw mn 'nh m rn n ḥm=i 'w.s.

(27)

“Now thou shalt cause that the Oath be established in the name of my majesty”

“Du sollst veranlassen, daß das Dauern eines Schwures beim Namen meiner Majestät, LHG, veranlaßt wird”

邦語訳を検討するのに先立ち、まずはこの用例の内部を構成している命題の階層を把握しておきたい。先行文脈と文自体の意味内容を考慮するならば、この用例では以下のように3つの命題が入れ子の状態にあるものと判断される。(上記の英語訳、独語訳も参照。)

$[dd=k [di.tw [mn 'nh m rn n ḥm=i 'w.s.]_A]_B]_C$ ⁽²⁸⁾

A：宣誓が余 l.p.h. の名前において確固となるコト

B：人がAをさせるコト

C：あなた(トゥリ)がBをさせるコト

すなわち、新たに即位したトトメス1世の王名により宣誓を確立するという内容の命題Aが、この文の最も内部に中心的な命題として存在し、それを包含して使役を表現する命題B、さらにまたそれを包含するかたちでやはり使役を表現する命題Cが存在している。

この命題の階層を踏まえたうえで、次に両モデルに対応するそれぞれの邦語訳を具体的に検討しよう。

【例文10】 Urk. IV 80, 17

dd=k di.tw mn 'nh m rn n ḥm=i 'w.s.

ハ分裂文：「あなたが、宣誓が確固となるようにされるよう、させるのは、余 l.p.h. の名前においてだ」

ノ(ダ)構文：「あなたは、宣誓が余 l.p.h. の名前において確固となるようにされるよう、させるのだ」

例文9において確認したのと同様に、この用例においてもハ分裂文とノ(ダ)構文による邦語訳の意味内容は等価ではない。それは、焦点化された副詞類「余 l.p.h. の名前において」と直接結びつけられる動詞とその主部の対が、前者では「あなたが - させる」なのに対して、後者においては「宣誓が - 確固となる」であるためである。

しかしこの用例では、例文9の場合とは異なり、前者と後者の差異がこの文

の解釈に対して重大な齟齬をきたす。すなわち、この文の焦点化された副詞類「余 l.p.h. の名前において」は上で確認した命題の階層において命題 A に属するが、この命題 A に対応する解釈を引き出すことができるのは、上記の 2 つの邦語訳のうち、ノ(ダ)構文によるものからでしかない。したがってこの用例の強調構文に対する統語構造としては、ハ分裂文に対応する副詞文モデルよりも、ノ(ダ)構文に対応する名詞文モデルのほうが、妥当性が高いと判断することができる。⁽²⁹⁾

このように、2 重に使役文に埋め込まれた節の内部に存在する副詞類を焦点化する⁽³⁰⁾用例は、名詞文モデルを支持する事例である。

ii) 接尾代名詞をともなう与格の焦点化

中エジプト語の定動詞形を用いる動詞節の基本語順は、①動詞 - ②[主部、目的語] - ③付加語であり、このうちの主部と目的語の順序については、それらが代名詞であるか名詞であるかに応じて、代名詞が先行するようにして配置される。⁽³¹⁾この基本語順における例外は、本来は付加語に属する、前置詞 *n* に接尾代名詞が後続した与格である。⁽³²⁾たとえば例文11に示されるように、接尾代名詞をともなう与格 ($n=s$) は、主部が代名詞である場合には主部 ($=f$) に後続するのに対し、主部が名詞である場合には動詞語幹+接辞 ($\underline{dd.n}$) と主部 ($p/y=s sn$) の間に挿入されて配置される。

【例文11】 Westc. 12, 14-15

$\dot{h}.n \underline{dd.n}=f n=s \dots\dots$

「すると彼は、彼女に言った。……」

$\dot{h}.n \underline{dd.n} n=s p/y=s sn \dots\dots$

「すると彼女の兄は、彼女に言った。……」

このふるまいは、接尾代名詞をともなう与格自体が焦点化される強調構文においても同様であり、主部が代名詞である場合には、例文12のように与格が主部に後続する。

【例文12】 Pt. 214

⁽³³⁾
 $nn ms.n.tw=f is n=k$

ハ分裂文：「彼が生まれたのは、あなたに対してではない」

ノ(ダ)構文：「彼は、あなたに対して生まれたのではない」

強調構文内部におけるこの与格の位置は、副詞文モデルに対応するハ分裂文、

および名詞文モデルに対応するノ(ダ)構文のどちらも適合可能である。

それに対して主部が名詞である場合には、例文13のように与格は主部に先行して配置される。

【例文13】CT IV 134c

ir.n.t(w) n=i ḥtp̄t
“It is for me that offerings have been made”⁽³⁴⁾

この用例に対して副詞文モデルを適用した場合、定義により、与格 ($n=i$) が想定された副詞文の述部、定動詞形 (*ir.n.t(w) ḥtp̄t*) が名詞主部となるが、すでに幾度か指摘⁽³⁵⁾されているように、ここでの与格の位置は、この文を副詞文として理解することに対して不具合をもたらす。なぜならばここで実現されている文の外形からは、副詞文の主部の内部に述部が入り込むという、通常取る⁽³⁶⁾ことのできない構造が想定されなければならないためである。またこの用例を、上述の主部 - 述部構造を反映させるとともに、適確な解釈を保持したままハ分裂文から派生⁽³⁷⁾して訳出することもできない。

他方、名詞文モデルの場合には、与格がこの位置にあっても不具合を生じることはない。なぜならばこのモデルでは、ノ(ダ)構文の場合と同様に、元の動詞節の語順を保持したまま動詞形を名詞化することで、強調構文を派生するとみなすことができるためである。

したがって、この用例に対してハ分裂文とノ(ダ)構文を適用する試みは、以下のような結果となる。

【例文13’】CT IV 134c

ir.n.t(w) n=i ḥtp̄t

ハ分裂文： 適合不能

ノ(ダ)構文：「供物が私に対してなされたのだ」

このように、接尾代名詞をとまなう与格が名詞主部に先行する強調構文の用例は、名詞文モデルを支持する事例である。

iii) 疑問副詞類の語順変更

前節において動詞節の基本語順について触れたが、強調構文の焦点要素としての疑問副詞類は付加語に相当するため、通常、定動詞形に後続する文末の位置を占める。このような用例は、むしろ副詞文モデルおよび名詞文モデルの双方に対して中立的である。

【例文14】CT V 93c T1C

*wd=i sw irf **tn***

ハ分裂文：「私がそれを据えるのは、いったいどこにか？」

ノ(ダ)構文：「私は、いったいどこにそれを据えるのか？」

中エジプト語は、語順に対する自由度が高い日本語とは異なり、原則的に基本語順を固持してそれを崩すことはないが、焦点として疑問副詞類をともなう強調構文の用例の一部には、疑問副詞類が基本語順とは異なる位置を占めるものが存在する。以下ではそのような用例を取り上げ、生起した語順変更に対して、両統語モデルのもとで想定される統語分析の妥当性について比較する。

【例文15】CT III 202i B3L

⁽³⁸⁾
*n išt irf tm=k wnm **hs** swr {=k} wsšt*

ハ分裂文：「いったいなぜか、あなたが便を食えず、尿を飲まないのは？」

ノ(ダ)構文：「いったいなぜ、あなたは便を食えず、尿を飲まないのか？」

上記の用例では、焦点である疑問副詞句 *n išt* 「なぜ？」が、基本語順から期待される文末ではなく、文頭に位置している。

副詞文モデルの観点からは、この用例は副詞述部である疑問副詞句が主部である名詞的動詞形に前置されたものとみなすことができる。そして、この前置を反映させてハ分裂文から派生した邦語訳も、⁽³⁹⁾(一般性は低いものの)容認可能な文である。

他方、名詞文モデルの観点からは、この用例は焦点の文要素である疑問副詞句が文頭に前置されているとみなすことができるが、日本語では単文の文要素をその文頭に移動することが可能であるため、⁽⁴⁰⁾外形的に対応するノ(ダ)構文によって適確な邦語訳を得ることができる。

⁽⁴¹⁾したがって疑問副詞類が文頭に位置する用例は、両方の統語モデルに対して中立的であると判断される。

また疑問副詞類は語順変更により、以下の用例のように、動詞句の動詞とその直接目的語の間に現れることもある。

【例文16】CT III 51f

*rdi.n=k wnm=k irf **tn** sw*

ハ分裂文：適合不能

ノ(ダ)構文：「あなたは、あなたがそれをいったいどこで食べるようにしたの

か？」

分析結果をはじめに示したが、このような語順変更の場合には、文頭に移動した場合とは異なり、副詞文モデルと名詞文モデルの適用に対してその適合性に差を生じる。

この用例に副詞文モデルを適用した場合には、副詞述部である疑問副詞が、副詞文の名詞主部の内部に、しかもこの場合には、名詞的動詞形 $rdi.n=k$ の目的語相当節として埋め込まれている動詞節 $wnm=k sw$ の内部という深い場所に、位置しているものと分析されなければならない。そのような統語分析は、上記 ii) 節で議論した接尾代名詞をともなう与格の場合と同じ理由により想定が困難であり、また語順の自由度の高い日本語においても、その統語分析を反映させてハ分裂文からその解釈を保持した邦語訳を派生することはできない。

他方、この用例に名詞文モデルを適用した場合には、上記 i) 節で議論したように、焦点要素である疑問副詞自体は、埋め込まれている動詞節に属する付加語と考えることができる。したがってこの語順変更に対しては、統語分析の上でより妥当性の高い、同一動詞節内の直接目的語と付加語の間での位置交換⁽⁴²⁾を想定すればよい。また日本語では、動詞句内部で文要素を移動することができるため、この用例の語順を反映させたノ(ダ)構文により適確な邦語訳を得ることが可能である。⁽⁴³⁾

以上の議論から、動詞句の動詞とその直接目的語の間に疑問副詞類が現れるような語順変更をともなう強調構文の用例は、名詞文モデルを支持するものと判断される。⁽⁴⁴⁾

IV. 結 論

前章における 3 つの非中立的事例の検討結果を統合すれば、中エジプト語の強調構文の統語構造としては、これまで有効なモデルとみなされてきた副詞文モデルよりも、むしろ名詞文モデルのほうが妥当性の高いモデルであると結論づけられる。

ただし、名詞文モデルの提案者であるアレンは、強調構文に対して表現されていない主部を補うことを想定しているのに対して、強調構文とノ(ダ)構文の対応に着目する本稿の立場からは、主部を補う必要はないと判断される。したがって、本稿の結論はその点においてアレンの分析とは異なり、強調構文の実

体は、「文頭に位置する定動詞形を名詞化することにより、(裸の)動詞文をその形を保ったまま名詞文化した、一項名詞文に相当する構文」であると理解される。

本稿では、日本語構文との比較対照を通じて、中エジプト語の強調構文の統語構造を導き出した。この結論を中エジプト語の構文体系の中に位置づけるためには、強調構文と直接、あるいは間接に関連する他の構文との整合性の検討⁽⁴⁵⁾が必要であるが、その点については今後の課題としたい。

略号

本稿で使用中エジプト語資料の略号は、以下の通りである。

BD (Nu) (ヌウの死者の書) : G. Lapp, *The Papyrus of Nu*, London, 1997.

CT (コフィン・テキスト) : A. de Buck, *The Egyptian Coffin Texts*, 7 vols., Chicago, 1935-1961.

Heqanakht (ヘカナクト文書) : J. P. Allen, *The Heqanakht Papyri*, New York, 2002.

Kamose (カーメスの第2ステラ) : W. Helck, *Historisch-biographische Texte der 2. Zwischenzeit und neue Texte der 18. Dynastie*, Kleine ägyptische Texte 6, Wiesbaden, 1983², 91-97.

Pt. (プタハヘテプの教訓) : Z. Žába, *Les maximes de Ptahhotep*, Prague, 1956.

Peas. (雄弁な農夫の物語) : R. B. Parkinson, *The Tale of the Eloquent Peasant*, Oxford, 1991.

Semnah Desp. (セムナ急送公文書) : P. C. Smither, "The Semnah Despatches," *Journal of Egyptian Archaeology* 31 (1945), 3-10.

Urk. IV : K. Sethe, *Urkunden der 18. Dynastie*, Heft 1-16, Berlin, 1961 (reprint of 1927-1930 ed.).

Westc. (ウェストカー・パピルス物語) : A. M. Blackman, *The Story of King Kheops and the Magicians*, Reading, 1988.

注

(1) この構文の機能をその名称において標示する際に、「強調」という不明確さを含んだ語を使用することは、必ずしも適正であるとはいえない。しかしながら、この語が学史上慣習的に用い続けられ、現在もお文法書等において広く用いられていることから、本稿でもそれに従う。(この点に関する経緯については、Depuydt 1983, 19-38を参照。)

用語について付言すれば、本稿で用いる用語は、総じてエジプト語研究の文献における用語法に則している。

(2) 正確には副詞述部文であるが、ここでは副詞文と略す。名詞述部文および動詞述

部文についても同様。

- (3) 強調構文で用いられる動詞形については、これを接尾活用とみなす立場（たとえば Malaise & Winand 1999）と、関係形とする立場（たとえば Allen 2000）とがある。
- (4) 必須構成要素の副詞類以外に、任意構成要素としての副詞類もこの構文内に存在することができるが、それらは後述する前者の特性を有していない。
- (5) 英語訳は Loprieno 1995, 192, 仏語訳は Malaise & Winand 1999, 386 による。邦語訳については、第Ⅱ章にて議論する。
- (6) 強調構文で用いられる定動詞形の種別については、研究者によって見解が異なる。本稿では能動態として、アレンにより提示されている完了 (*perfect*) $sdm.n=f$, 完結 (*perfective*) $mr=f$, および未完結 (*imperfective*) $mrr=f$ (Allen 2000, 363) に、前望 (*prospective*) $sdm(w)=f$ (Polotsky 1976, 24; Malaise & Winand 1999, 377-378) を加えた 4 種類の形の存在を想定している。
- (7) 強調構文で用いられる未完結 $mrr=f$ における動詞クラスと形態の関係については、たとえば Allen 2000, 348 を参照。
- (8) この点に関しては、Silverman 1985 ならびに Allen 2000, 364-367 を参照。
- (9) 強調構文の情報伝達上の特性を記述する場合、通常は「テーマ (*theme*)」および「レーマ (*rheme*)」という、対になる用語が用いられる。(たとえば Vernus 1991; Allen 2000, 369-374) しかし本稿では、日本語構文との比較対照が議論の中心であることから、日本語学において広く用いられている用語である「焦点 (*focus*)」を用いることとする。(用語「テーマ」、「レーマ」、および「焦点」に関しては、Shisha-Halevy 1988 の巻末にある用語解説も参照。)
- (10) このようにして導かれる強調構文の解釈を西欧語の英・仏語に翻訳する際には、一般的な手段として、例文 1 でのように “it is ... that ...” / “c’est ... que ...” といった分裂文がしばしば利用される。
- (11) このモデルの提案とその中エジプト語への適用に関しては、ポロツキーによる一連の論文 (Polotsky 1944; 1957; 1965; 1976) を参照。またその概要とそれに関連することがらについては、Depuydt 1983; 永井 2000 に整理されている。
- (12) コプト語テキストは Polotsky 1944, 67 から引用し、分節の表記方法については Layton 2004 に従った。また翻訳は, Aland *et al.* 1993 の英語訳 (改訂標準訳) による。
- (13) とりわけ, Polotsky 1976, 40 において明示的に図示されている。
- (14) なおこの論文でアレンは、否定詞 $n \dots is$ によって括られた $sdm=f$ 形に名詞形を特徴づける畳音形が欠如していることから、この環境に現れる $sdm=f$ 形が通常の名詞形ではない可能性を示している (Allen 1979, 10-11)。しかし後に彼は、畳音する未完結 $mrr=f$ に並行して非畳音の完結 $mr=f$ を設定することで、この点を修正した (Allen 1991, 5)。
- (15) これまでに名詞文モデルを正面から取り上げた唯一の議論として、副詞文モデルの立場を採るユング F. Junge による, Allen 1979 に対する「反論」(Junge 1979) があ

る。ただし、名詞文モデルに対する明確な「反証」がそこで挙げられているとは言いがたい。

- (16) 正確には「テーマである NP → レーマ(あるいは焦点)である AdvP」である。強調構文の翻訳手段として利用される西欧語の分裂文(注10)は、この点において強調構文と形式的に対応していない (Polotsky 1976, 17-18; Shisha-Halevy 1986a, 72-73)。
- (17) ハ分裂文に関しては、野田 1996, 64-74; 砂川 2007を参照。
- (18) 比較のため、ラベル付き括弧表示は副詞文モデルに直接対応するもののみに付してある。またこれ以降の邦語訳では、焦点に相当する部分に下線を付して明示する。
- (19) ノダ構文に関しては、さまざまな立場からの多くの分析が存在するが、本稿では野田春美による分析(野田 1997)を採用する。
- (20) 他方、「ムードの『のだ』」をともなうノダ構文に対応する中エジプト語の形式には、*Spw* 構文が挙げられる (小山 2006)。
- (21) 準体助詞「の」のスコープと焦点位置の関係については、田窪 1987も参照。
- (22) 比較のため、ラベル付き括弧表示は名詞文モデルに直接対応するもののみに付してある。なお日本語のノ(ダ)構文では、焦点化されていない主部(本例における「国土」)が、主部の人称や文脈等に応じて話題化されることが多い。この話題化された主部は、準体助詞「の」によって名詞化される範囲の外側に位置するとされる (田窪 1987; 野田 1997, 34-35) が、この主部のふるまいは、動詞と焦点化副詞類の間の統語的な関係に主として着目する本稿の議論には影響を及ぼさない。
- (23) 以下では、エジプト語テキストに対する転写記号による表記のうち、焦点に相当する部分を太字にして明示する。
- (24) 日本語話者の感覚からすれば、ここで挙げられたハ分裂文による邦語訳は、ノ(ダ)構文のものよりもやや不自然さを感じるかもしれない。しかしここでは、モデルに対応させた邦語訳が非文でないこと、ならびにそこから引きだされる解釈が妥当であることを、判断の基準としている点に留意されたい。
- (25) このようなケースにおける代替的な翻訳方法として、ポロツキーは、以下のよう
に主節の動詞形を従属節に、副詞類を主節に変換することを提案している (Polotsky 1965, 8-9)。: “When saying this spell, one shall be pure, clean, dressed, shoed, etc., and one shall have offered up ……”
- (26) これ以外に、複数の名詞的動詞形が一つ、あるいは複数の副詞類を焦点化する事例も存在する (Vernus 1991, 350-351) が、それらについては紙幅の都合によりここでは触れない。
- (27) 英語訳は Wilson 1948, 149, 独語訳は Klug 2002, 68 による。
- (28) この用例における小辞 *ih* は、丁寧な要求を表現するために用いられており (Vernus 1990, 112), ここでの検討対象である命題のレベルには関与しないため、以下の議論では考慮しない。
- (29) マレーズ M. Malaise とウィナン J. Winand も、この用例における名詞化動詞形と

焦点化副詞類の関係に注意を促している。彼らもまた、問題の焦点化副詞類が最も情報を担っている部分ではあるが副詞述部の役割は果たしていないとしている (Malaise & Winand 1999, 387) もの、統語構造としては動詞文を想定している (Malaise & Winand 1999, 236-237)。なお、強調構文の定動詞形が動詞述部を含むとみなす案について、彼らは小辞 *iw* の欠如と関連づけることで説明しているが、名詞的動詞形とみなす場合に比べて、直接的な根拠に欠けていることは否めない。そのため、本稿ではこの統語分析を取りあげない。(同様のことは、Vernus 1997, 38-39 において提示されている、「文法化」に立脚した分析に対してもいえる。)

(30) 類例: Urk. IV 80, 15-16 *dd=k di.tw m' htp-ntr hr-tp 'nh wd' snb nswt-bity 'h-pr-k' -r' di 'nh* (この用例については、Gardiner 1957, 353 も参照。)

(31) 基本語順に関しては、Allen 2000, 163 を参照。

(32) 前置詞 *n* に名詞が後続した場合には、付加語と同じようにふるまう。

(33) ここでは、否定辞 *n... is* における要素 *n* の代わりに *nm* が用いられている。(この点に関しては、Allen 2000, 402 を参照。)

(34) 英語訳は、Polotsky 1957, 111 による。

(35) これに関しては、Allen 1994, 2; 2000, 407, および Vernus 1997, 32-33 を参照。

(36) ポロツキー自身も、接尾代名詞をともなう焦点化された与格の位置については、例外とみなしている (Polotsky 1965, 8)。

(37) 形式的には、「供物が、私に対してだ、なされたのは」といった邦語訳が相当すると思われるが、通常の状態での文からハ分裂文「供物がなされたのは、私に対してだ」と等価な解釈を引き出すことは困難である。

(38) 異文の B1L では、疑問副詞句は *hr isst* である。

(39) これとは異なる分析の可能性については、Shisha-Halevy 1986b, 650-651, n.37 に言及がある。

(40) 生成文法の枠組みでは、このタイプの語順変更は「短距離かき混ぜ」と呼ばれる。(日本語のかき混ぜ文のタイプに関しては、三原 2008, 148-150 を参照。)

(41) 類例: Kamose 20 *hr m 'h' =k m h'k' nn rdit rh =i*

(42) この用例のタイプの位置交換が生じる動因は、不変化小辞 *irf* の挿入位置にあると思われる (Gardiner 1957, 405; Shisha-Halevy 1986b, 650-651, n.37)。

(43) 生成文法の枠組みでは、このタイプの語順変更は「動詞句内かき混ぜ」と呼ばれる。

(44) 類例: CT III 108a B1Bo *wnm=k irf tn sw*

(45) 特に、強調構文が副詞類を焦点化する機能を有することについては、分詞陳述や擬似分裂文といった、他の焦点化構文との関係の中で捉えなおされる必要がある。

参考文献

Aland, K. et al. (eds.) 1993⁷: *Greek-English New Testament*, Stuttgart.

- Allen, J. P. 1979 : “Is the “Emphatic” Sentence an Adverbial-Predicate Construction?,” *Göttinger Miszellen* 32, 7-15.
- Allen, J. P. 1991 : “Form, Function, and Meaning in the Early Egyptian Verb,” *Lingua Aegyptia* 1, 1-32.
- Allen, J. P. 1994 : “Pronominal Rhematization,” in D. P. Silverman (ed.), *For His Ka: Essays Offered in Memory of Klaus Baer*, Chicago, 1-13.
- Allen, J. P. 2000 : *Middle Egyptian*, Cambridge.
- Depuydt, L. 1983 : “The Standard Theory of the “Emphatic” Forms in Classical (Middle) Egyptian: A Historical Survey,” *Orientalia Lovaniensia Periodica* 14, 13-54.
- Gardiner, A. H. 1957³ : *Egyptian Grammar*, Oxford.
- Junge, F. 1979 : “Adverbialsatz und emphatische Formen, Nominalsatz und Negation. Eine “Gegendarstellung”,” *Göttinger Miszellen* 33, 69-88.
- Klug, A. 2002 : *Königliche Stelen in der Zeit von Ahmose bis Amenophis III*, Turnhout.
- Layton, B. 2004² : *A Coptic Grammar*, Wiesbaden.
- Loprieno, A. 1995 : *Ancient Egyptian*, Cambridge.
- Malaise, M. & J. Winand 1999 : *Grammaire raisonnée de l'égyptien classique*, Liège.
- Polotsky, H. J. 1944 : *Études de syntaxe copte*, Le Caire.
- Polotsky, H. J. 1957 : “The “Emphatic” *sdm.n.f* Form,” *Revue d'égyptologie* 11, 109-117.
- Polotsky, H. J. 1965 : *Egyptian Tenses*, Proceedings of the Israel Academy of Sciences and Humanities, Vol. 2, No. 5.
- Polotsky, H. J. 1976 : “Les transpositions du verbe en égyptien classique,” *Israel Oriental Studies* 6, 1-50.
- Shisha-Halevy, A. 1986a : *Coptic Grammatical Categories*, Roma.
- Shisha-Halevy, A. 1986b : “(i)rf in the Coffin Texts: A Functional Tableau,” *Journal of the American Oriental Society* 106, 641-658.
- Shisha-Halevy, A. 1988 : *Coptic Grammatical Chrestomathy*, Leuven.
- Silverman, D. P. 1985 : “Verbal Nominal Clauses in Middle Egyptian,” in P. Posener-Kriéger (ed.), *Mélanges Gamal Eddin Mokhtar*, Vol. 2, Cairo, 269-285.
- Vernus, P. 1990 : *Future at Issue. Tense, Mood and Aspect in Middle Egyptian*, New Haven.
- Vernus, P. 1991 : “Le rhème marqué: typologie des emplois et effets de sens en Moyen Égyptien,” *Lingua Aegyptia* 1, 333-355.
- Vernus, P. 1997 : *Les parties du discours en moyen égyptien*, Genève.
- Wilson, J. A. 1948 : “The Oath in Ancient Egypt,” *Journal of Near Eastern Studies* 7, 129-156.
- 小山彰 2006 : 「日本語の「のだ」に対応する中エジプト語の形態 *pw*」『オリエント』49/1, 21-38.
- 砂川有里子 2007 : 「分裂文の文法と機能」『日本語文法』7/2, 20-36.
- 田窪行則 1987 : 「統語構造と文脈情報」『日本語学』6/5, 37-48.

- 永井正勝 2000:「後期ボロツキー説における中エジプト語の文／節体系」『オリエント』
43/1, 19-39.
- 野田春美 1997:『「の(だ)」の機能』Frontier series 日本語研究叢書9, くろしお出版.
- 野田尚史 1996:『「は」と「が」』新日本語文法選書1, くろしお出版.
- 三原健一 2008:『構造から見る日本語文法』開拓社 言語・文化選書6, 開拓社.